

保育者養成における学生の創造力および表現力の育成 —複数の表現分野を取り入れた児童文化財の創作と 発表の取り組みから—

山川 智馨*, 増原 真緒**

要約

本研究は、保育者養成における創造力および表現力の育成方法の可能性を探ることを目的とする。その方法として、大掛かりな表現発表会ではなく「保育現場における子どもの日常生活に根差した活動」をコンセプトに、保育学専攻学生が大型絵本や紙芝居の児童文化財の創作や、読み聞かせ中の効果音や音楽あそびへの発展といった、複数の表現分野を取り入れた活動を実際に保育所の子どもたちの前で発表するという内容の授業を、2017年度と2018年度の2年間にわたって行った。そして各年度における学生の様子、発表の振り返りや保育者へのアンケートの記述内容を分析し、考察を行った結果、本取り組みをとおして学生の創造力および表現力の育成に一定の成果があったことが明らかとなった。今後は絵本や紙芝居を大型に限定しないこと、毎回の授業における学生の作業内容に計画性を持たせること、保育者へのアンケートの内容を見直すことの3点を課題とし、本取り組みの継続を目指していく。

キーワード：保育者養成 創造力 表現力 総合表現 児童文化

2019年9月27日受理（実践研究）

1. 問題提起と本研究の概要

1) 保育・幼児教育における創造力と表現力の関連

幼稚園教育要領における領域「言葉」ではそのねらいを達成するため、内容において「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」ことや「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」¹⁾ことが謳われており、これは保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様である。また、平成29年告示の幼稚園教育要領では、新たに「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」²⁾が加わった。その中の1つに「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語な

どに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」²⁾と挙げられている。

子どもは日々多くの経験をし、様々なことを感じたり考えたりするが、その全てを思うように言葉で表すことは難しい。子どもが自分の言葉で思いを表すようになるまでには、子ども自身の中に自分が経験したことをイメージとして蓄積すること、つまり想像力が関係しており、日常生活や遊びの中でそれを相手に伝えたいという思いを持ち始めることから言葉に興味を示し、次第に豊かな言葉が育まれていく。その際に保育者は、発達過程における子どもら

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：山川 智馨

〒690-0823 島根県松江市西川津町 4280

大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

E-mail: c.yamakawa@kenko-fukushi.ac.jp

**島根総合福祉専門学校

しい言葉をありのままに受け止めつつ、豊かな経験ができる保育を展開することが重要であり、その中の1つに児童文化財の活用も含まれている。保育者が絵本等の児童文化財の読み聞かせおよび保育活動等での活用を含めた保育表現において、自身が豊かな言葉を用いて子どもと関わりを持つことで、子どもたちがその楽しさや世界観を共有できるとともに、子どもの想像力をより豊かに育むことに繋がり、ひいてはそれが豊かな言語表現にも繋がっていく。つまり、子どもの豊かな想像力および言葉の発達を促すにあたり、まずは保育者自身が豊かな言葉を用いてかかわることが子どもに大きな影響を与えるのである。

また、子どもの表現を育てることについて、幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、「豊かな感性と表現」の項目は「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」⁹⁾とされている。これは前述の「言葉による伝え合い」に関わる言語表現も含めた、子どものあらゆる表現の土台を育むことを指している。このことからこの2項目は表現という点で相互に関連していることが読み取れる。

そしてこの一連の流れが領域「表現」とも密接に関連していることは言うまでもない。領域「表現」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することをとおして、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」⁴⁾とされており、子どもの表現を育むことで創造性が豊かになることに繋がっていくことがこの一文からわかる。創造性の豊かさ、つまり創造力は21世紀の知識基盤社会において強く求められている力であり、知識や技能を実生活で活用するために必要なスキルの1つとされている⁹⁾。つまり、表現力と創造力は切り離すことができないものであり、人格形成の基礎を培う乳幼児期にこれらの力を育むことの重要性は高いといえる。そして、女性の社会進出によって保育所の需要がますます高まっている現代において、その役割は子どもの成長発達を支える保育者が担っていくことが求められる

ことは明らかである。

2) 保育者養成における創造力および表現力育成の実際

まず、創造力の育成に関する先行研究では、麓(2018)が「音楽を生み出す遊び」の開発を目的として造形表現手法を参考にした音楽表現遊びを開発し、保育者養成校の学生を対象に教育実践を行っている⁶⁾。また、梶間(2016)は創造的音楽活動として絵本の場面をイメージした音楽や音を演奏する「音の絵本」の実践発表と学生の学びの関連性について考察している⁷⁾。表現力の育成に関しては、仲嶺(2008)が大型紙芝居制作の取り組みにより保育者に必要な表現技術の習得について報告しているほか、近藤(2015)がペープサートやパネルシアターといった保育教材の製作をとおした学生の表現技術向上を実践している。また、大規模な表現発表会をとおした実践は、大塚(2007)が20年にわたって実践を行った表現活動の総合的な学習プロジェクトを報告しているほか⁸⁾、指田(2013)は劇的表現活動について指導のあり方を学ぶ「子ども会実習」の実践報告を行っている⁹⁾。また、津山・富永ら(2014)は表現発表会をとおして「3分野を融合し実践的な力を身につける」という授業目的を達成したと報告している¹⁰⁾。上記の他にも表現力の育成に関する実践報告はあるが、表現発表会に関する実践の多くは劇やオペレッタ等を中心とした内容であり、それらの題材は既成の絵本や童話等の場合が多いようである。また、それらの表現発表会は子どもが学生と一緒に手遊びをしたり童謡を歌ったりする等の参加型の場面はあるものの、発表会という性質上どうしても子どもにとってはステージ上で行われる演目を観劇する時間の方が長く、日常とは異なる「特別なもの」になっているのではないかと予想される。

このことから筆者らは、子どもが観客となる大掛かりな発表会ではなく、毎日過ごす保育室の中で子どもの日常生活に根差した活動を実践することに着目した。具体的には、子どもにとって身近な存在である児童文化財を創作し、それに関連する音楽表現を取り入れた活動を立案する。そして近隣保育所にて実際に子どもたちに向けた発表をとおして、言

語・造形・音楽といった複数の表現分野の視点から保育者に求められる創造力および表現力を育成することを構想した。これと同様の先行研究は、管見の限り見当たらない。

2. 研究目的および方法

1) 目的

本研究では、将来保育者となる学生に身につけさせたい創造力および表現力の育成に関して、複数の表現分野を取り入れた児童文化財の創作と発表からその有効性を明らかにすることを目的とする。

2) 方法

(1) 授業の実施期間

①2017年10月19日～2018年2月21日

②2018年10月23日～2019年1月15日

(2) 対象学生

S 専門学校 児童福祉科

2017年度2年生(20名)

2018年度2年生(22名)

(3) 科目名

「児童文化演習」(必修科目, 2年後期開講, 全15回)

(4) 分析方法

毎回の授業における学生の様子について、写真撮影および観察による記録を行う。そして発表後に実施した学生の振り返りシートおよび保育者へのアンケート調査の記述内容を分析し、創造力と表現力の育成に関する考察を行う。

3. 授業の実際

初回授業にて各年度とも、1グループ4～5名ずつの計4グループに分かれ、その後の授業はほとんどの時間をグループ活動として実施している。授業全体の流れは以下の通りである。

- ①物語の決定と内容の修正
- ②大型絵本または大型紙芝居の創作
- ③大型絵本または大型紙芝居の内容と関連した活

動の考案および準備

④発表に向けたリハーサルの実施

⑤近隣保育所2歳以上児クラスでの発表

物語の決定については、前期開講科目である「言語表現」にて各学生がストーリーを想像して文章化した物語¹⁾を活用し、児童文化財を創作・発表を行った。

1) 2017年度

(1) 大型絵本の創作と活動準備の様子

学生のグループ配属は事前に授業担当教員である筆者らが相談して決めることとし、学生の特徴に応じて、リーダーシップをとることができる学生や描画が得意な学生など、どのグループも能力がなるべく偏ることのないようにした。メンバーを発表し、各グループに分かれると、物語の決定に時間を要するところもあったが、多数決や話し合いをしながら創作する物語を決定していった。

本年度は全てのグループが大型絵本を創作することとし、それぞれに作業を開始した。グループ内で比較的絵を描くことが得意な学生が下書きを担当しており、その他の学生は大型絵本のストーリーに関連した活動を考え、その準備をしたり、下書きが終わったものから順に大型絵本の色塗りをしたりしていった。学生オリジナルの大型絵本は、登場人物や内容が似通った物語は1つもなく、またそれに即した活動も各グループで特徴が活かされたものが完成した。

なお、全15回授業の内、最後の1回は振り返りおよび試験としていたため、創作および発表に関する授業は実質14回であった。その中で第8回および第14回が発表日であったため、準備時間は前半発表日までに7回、その後、後半発表日までの見直しを行う授業が5回であった。授業時間だけでは大型絵本の創作が間に合わず、空き時間等を利用して創作に取り組む姿も見られていた。

前半の発表に向けた期間は、どのグループも大型絵本の創作が丁寧かつきめ細やかになされた結果、それに時間を費やす結果となり、グループ内で発表の練習をする時間がほとんどとれず、リハーサル日の冒頭で短時間の準備時間を取るようになった。そ

してリハーサルから発表当日までにクラスメイトや筆者らより指摘された部分を修正および改善し、空き時間を利用して練習したグループも見られる中、本番当日を迎えた。

後半授業は前半の発表を終えて振り返りを行い、更なる工夫と練習に時間を費やした。

(2) 発表の内容と学生の様子

学生の創作した大型絵本および立案した活動内容は表1の通りである。なお、前半発表は2017年11月16日、後半発表は2018年2月21日に実施している。

①前半発表

初めての取り組みに緊張した表情や戸惑う様子も見られたが、進行を担当する学生は子どもの様子をよく観察しながら進めることができていた。Aグループでは時折、緊張等で言葉に詰まったり困った様子を見せたりする学生に対し、他の学生がフォローを入れるなど協力的に活動を進めることができた。また、Cグループは大型絵本を創作した際に、縦書きで文字を書いたのが本来は右開きだが、左開きの進行方向で絵を描いて製本してしまったため、聞き手側から見ると少々違和感のあるものとなった。

発表後の振り返りでは、グループ内で意見や反省点を出し合い、後半発表に向けた工夫・改善方法に

ついて話し合った。Bグループでは、活動で使った道具の教材研究に不足があったため、マジックの仕掛けが子どもにすぐに分かってしまったことが反省点としてあげられたことから、より良い表現方法を探ることが課題となった。また、Dグループは大型絵本からの活動としてわらべうたに展開した。発表した保育所の子どもたちはわらべうたに慣れ親しんでおり、実施したわらべうたも日頃楽しんでいたようだが、ペープサートも創作していたため、視覚的に訴えたことから子どもたちが新鮮な気持ちで楽しめたという良い意見が挙がった。

なお、前半発表中に展開した活動内容において、身体を動かす体操やゲーム要素のあるものも含まれており、学生らにとっては大型絵本の内容とリンクさせた活動であったようだが、保育現場の先生にはそうは感じられなかったようである。b保育所の先生からは「本取り組みにおいて、せっかく大型絵本をメインとしているのであれば、活動ももっとその世界観を大切にしたいものであると良い」とのご意見をいただいた。つまり、野菜が出てくる絵本であれば「野菜」をテーマに何を活動内容にしても良いわけではなく、「絵本」または「物語」という世界観を壊すことのない活動を検討してほしいということであった。そこで、筆者らよりその意見を学生に伝え、後半の発表に向けて活動内容や表現方法について再度検討することとした。

表1 各グループの発表内容 (2017年度)

グループ	保育所とクラス	大型絵本タイトル	あらすじ	活動
A	【前半】 a 保育園 4 歳児	ふしぎなおふろ (16 ページ+表紙, 裏表紙)	お風呂好きのおじいさんがある温泉に行き、色々なお風呂に入って楽しむ。	オリジナルダンス お風呂をテーマに替え歌をした集団遊び
	【後半】 c 保育園 3 歳児			
B	【前半】 a 保育園 5 歳児	うっかりかみさま うみをつくる (14 ページ+表紙, 裏表紙)	海を作ろうとしていた神様がうっかりその中に落ちてしまい、海の様々な生き物に出会う。	海に関するマジック ペープサート
	【後半】 b 保育所 4 歳児			
C	【前半】 b 保育所 4 歳児	だつて きれいだもん (16 ページ+表紙, 裏表紙)	偏食の男の子が嫌いな野菜たちに出会い、差し出された料理をおいしく食べると、中に苦手な食物も入っていたことで、おいしさを知る。	野菜に関するクイズ 手遊び「やおやおみせ」
	【後半】 b 保育所 5 歳児			
D	【前半】 b 保育所 5 歳児	くいしんぼうねこ かしこいさん ま (16 ページ+表紙, 裏表紙)	猫のバックンが食べようとしたさんまと仲良くなり、旅がしてみたいというさんまのために色々な国を旅する。	替え歌を發展させたわらべうた
	【後半】 c 保育園 4, 5 歳児			

②後半発表

前半発表の改善点を工夫し、取り組む準備を整えたが、予定していた発表当日は豪雪となり、急遽発表日を延期することとなった。日程変更に伴い、元々依頼していた d 保育所での実施が難しくなり、同日に 2 ヶ所の保育所に移動できるよう、学舎近隣の b 保育所に 2 度目となる発表の場の協力を依頼した。延期日はもともと授業が入っていない日に決定されたため、どうしても都合がつかず欠席した学生もいた。特に B グループは本来 5 名であったが、急遽 3 名での発表となってしまい、当日の朝に役割の見直しをした。

教員が事前に伝えた情報から、後半に発表する保育園ではわらべうたに慣れ親しんでいないことに不安を抱いた D グループは、新たにオリジナルのペープサートを創作し、それを見せつつ指差し等もしながらわらべうたで遊ぶことで、子どもたちが参加しやすくなるよう表現方法に工夫を見せた。また、A グループは大型絵本の「おじいさんが深いお風呂に沈んでいく」シーンでプラスチックカップと太いストローを使ってリアリティのある水音を表現したり、随所に効果音を入れたりするなど意識して音楽表現を加えたことで、子どもが強く興味を示していた。

発表後の振り返りでは、急遽 3 名という少人数での発表となった B グループから、自分が担当していた部分しか流れや役割を把握できておらず、台本を持って発表に向かうなど、子どもの前で行う表現として適切でなかったとの反省が挙げられた。C グループは活動内容のマジックの仕掛けが子どもたちに分かってしまったが、それを逆手にとった対応をすることで笑いに包まれた雰囲気の中、逆境に立った表現を工夫することができた、と急な事態での対応について意見が出された。D グループでは、わらべうたに出てくる「さんしょう、とうなす」等の日本古来の言葉に子どもが難しさを抱く様子から選曲や表現方法について反省点が挙げられた。

(3) 考察

①創造力と表現力における学生の学び

どのグループにおいてもストーリーの創造はメンバー同士で意見を出し合っ

て完成させていた。また、学生により絵を描くことや創作作業に得手不得手はあったようだが、各グループならではの創造性に富んだ発表内容となっていた。どの大型絵本も子どもの興味を引くものが出来上がり、その世界観に浸って子どもが穏やかな表情で見入っていたことから、今回の取り組みおよび作業をとおして、学生の創造力が豊かに培われたことが感じられた。

また、表現方法にも工夫を凝らし、役割分担によって子どもたちに新鮮な気持ちで 30 分間を過ごしてもらえるよう各学生が自分の担当箇所を中心に練習することができたようである。ペープサートを用いて発表をしたグループでは、子どもたちがその世界観に浸ることができるよう、机の後ろに姿を隠して演じるという工夫を凝らした半面、子どもと意思疎通が図りづらかったことを反省に挙げ、豊かな表現を求めつつも子どもの様子を窺ったり息を合わせたりするための方法について考える良い機会となったことが分かる。大型絵本の読み聞かせにおいて、本物の水音を表現するために使用するストローやカップの教材研究をするなど、その豊かな表現から子どもたちの楽しそうな笑顔が見られ、学生の表現の幅が広がったことが明確であった。

②課題および改善点

1 点目に大型絵本の創作に非常に時間を要することが挙げられる。子どもを前に発表や保育を展開するためには、事前に役割分担や入念なりハーサルをする必要があるが、大型絵本の創作にほとんどの時間を費やすこととなってしまった結果、子どもに向けて表現することへの事前準備が不足していた。この問題を解決するため、翌年度は製本の必要がない紙芝居の形にすることとした。

2 点目に学生が発表するにあたり、子どもと初対面で関係性が築けていない状況での実施となったことである。学生からも意見が挙げられたが、突然保育室へ入ってきた学生を見て子どもたちが戸惑ったことで、学生の緊張感も高まり、十分に各学生が表現力を発揮できたとは言い難く、本取り組みのコンセプトである「保育現場における子どもの日常生活に根差した活動」となり辛い部分もあった。しかし授

業時間の都合上、発表前に関わりを深める時間をとることはどうしても難しく、これは今後の課題である。

3点目に、本取り組みでは大型絵本の創作という造形表現、子どもに向けた発表と活動の実施という言語表現を含めた保育表現は含まれているものの、音楽的要素が不足していた。授業の冒頭では何らかの形で音楽表現を取り入れることを伝えていたが、前述した通り大型絵本の創作や活動準備に時間を費やしたために音楽的要素を取り入れる余裕がなかったのが実態であった。そこで翌年度は大型紙芝居の読み聞かせの際、または活動において楽器を用いて音楽表現を加えることを学生に伝えることとした。

2) 2018年度

(1) 大型紙芝居の創作と活動準備の様子

学生のグループ配属は前年度と同様の方法により決定した。また、全15回授業の内、最後の1回は振り返りおよび試験であり、発表に関する授業は実質14回であったのも前年度と同様である。

昨年度と異なる点は、まず、前年度の反省から前半の発表日を授業の第8回から第10回と後らせ、前半の準備時間を9回と増加させたことである。その分後半の準備時間は3回と減少したが、前半の発表をふまえた修正が目的であることから、この回数で妥当だと判断した。また、絵本から紙芝居に変更し、昨年度の製本作業に要した時間を発表の練習時間に充てることのできるようにした。しかし実際に準備が始まってみると、絵の下書きを1人の学生が担当するため、製本自体は不要であるものの、筆者らの想定より紙芝居の完成に時間を要する結果となった。さらに色塗りも下書き同様に時間を要し、発表の練習が授業時間の中でできたグループは僅かだった。

音楽表現の要素を取り入れることに関しては、初回授業にて取り入れ方やその場面などについて、いくつか例を挙げたり実際に楽器を鳴らしたりして学生に説明を行った。その結果、学生はイメージを持ちやすかったようで、「この場面でこの楽器を鳴らしたい」、「読み聞かせで使った音を当てるゲームをしてみたい」等といった意見交換がどのグループも活発に行われた。なお、使用できる楽器は専門学校の

備品19種類と筆者の私物である4種類の民族楽器の他、廃材等で音や楽器を自作しても良いとあらかじめ学生に伝えた。

リハーサルでは準備不足で表現力が乏しい学生もいたが、クラスメイトや筆者らより指摘された部分を修正および改善した。

(2) 発表の内容と学生の様子

学生の創作した大型紙芝居および立案した活動内容は表2の通りである。なお、前半発表はA保育所とB保育所にてそれぞれ2018年12月4日および2018年12月18日、後半発表はC保育所とD保育所にてそれぞれ2019年1月11日および2019年1月15日に実施した。

①前半発表

3歳児のクラスに入ったBグループは、段ボールで作った家から学生が出てくるマジックの導入が子どもたちの興味を引き、「もう1回見たい」という声が多く上がった。そのため急きょ2回目を行うなど、学生は臨機応変に活動の流れを変更していった。Aグループも読み聞かせ後の合奏と歌唱の活動で、保育室の外まで子どもたちの声が聞こえるほどの盛り上がりを見せた。反対に、Cグループは紙芝居の読み聞かせ後に地元の島根に関するオリジナル手遊びを行ったが、歌詞が3番までであったため、限られた時間で3歳児の子どもたちと楽しむにはやや長く、全体をとおして盛り上がりには欠ける結果となった。

発表後の振り返りでは、BグループはマジックのBGMとして演奏した鉄琴の音が子どもにとって「うるさい」と感じるほどの大きな音だったこと、紙芝居のパーティーの場面での演奏はもっと盛り上がりのある曲の方が良かったことなど、音楽表現に関する反省が多く出た。AグループとCグループは読み聞かせの際の表現に関する反省は出なかったが、導入のクイズの出題の仕方や子どもたちへの臨機応変な動きといった、発表全体をとおした表現力に関する意見が出た。また、2歳児のクラスで発表を行ったDグループは、「子どもたちの声が拾えなかった」「自分たちの声が小さかった」等、子どもたちの表現を受けとめることや自分たちの表現力について、

表2 各グループの発表内容 (2018年度)

グループ	保育所とクラス	紙芝居タイトル	あらすじ	活動
A	【前半】 b 保育所 4 歳児	レオとふしぎ な女の子 (11 枚+表紙)	湖に落ちた主人公のレオ が、見知らぬ世界で女の 子と出会い不思議な体験 をする。	なぞなぞ 手作り楽器の 合奏と歌唱
	【後半】 d 保育所 4, 5 歳児			
B	【前半】 b 保育所 3 歳児	わくわく はる かちゃんのお さんぼ (11 枚 +表紙)	散歩をしていた女の子が 手から落ちたどんぐりを 追って木の中に入り、人 間のように喋るどんぐり たちと出会う。	マジック 合奏
	【後半】 d 保育所 3 歳児			
C	【前半】 a 保育所 3 歳児	ジミーくんの だいぼうけん (12 枚+表 紙)	突道湖に住んでいるジジ ミのジミーくんが宇宙に 飛ばされ、様々な体験を する。	クイズ オリジナル手 遊び
	【後半】 c 保育所 5 歳児			
D	【前半】 a 保育所 2 歳児	ちょっとした ぼうけん (14 枚+表紙)	どんぐりの三兄弟が部屋 を飛び出して冒険する。	手遊び クイズ
	【後半】 c 保育所 4 歳児			

納得のいく発表ができなかったことが課題となった。

②後半発表

A グループは「導入のなぞなぞが簡単だったため、ほとんどの子どもが手を挙げて答えを言いたがっていた」という反省から、今回の発表では問題を多少難しくし、全員が分かった答えは「せーの」の声かけで一斉に答えるように変更した。C グループは今回 5 歳児クラスに入ることになったため、前回と異なる年齢の子どもたちへの発表となったが、クイズで例題を設けたり、分かりやすい言葉を心がけたりする等の改善を行った。

発表後の振り返りでは、準備不足が課題だった D グループは、子どもとの臨機応変なやり取りで表現を受けとめることや発表全体の流れを改善することができたと評価する意見が前回より多く挙がった。ただし子どもの想定外の反応へはなかなか対応することができなかったという反省も同時に出された。C グループは前回の 3 歳児と今回の 5 歳児で単純な比較は難しいものの、子どもたちの反応が良かったことから、発表全体をとおした表現への達成感が高かった。A グループもなぞなぞの難易度を改善したことや全員で答える場面を作ったこと、読み聞かせ後の音楽あそびも子どもの反応を拾えたと感じる場面

が多かったことから、子どもの表現を受けとめることができ、納得のいく発表になったと自己評価した。音楽表現に関する課題を挙げていた B グループは、子どもたちがうるさいと感じた鉄琴を木琴に変更したことや、パーティーの場面での演奏で楽器を増やしたことで、読み聞かせ後の合奏で子どもたちがエッグシェイカーを楽しそうに鳴らしていた姿から、改善の成果が出たと感じていた。

(3) 考察

①創造力と表現力における学生の学び

学生個人での振り返りでは、「他者と意見を出し合うことで、自分 1 人では思いつかなかったアイデアが生まれた」と記述した学生が 6 名いた。また、授業内容が「難しかった」と記述した学生は 5 名おり、理由は「物語だけでなく前後の活動も自分たちですべて考えること」「子どもの年齢に合わせて分かりやすい表現を心がけること」「良いと思っていた音を実際に紙芝居と合わせてみると合わなかったこと」「自分のイメージをメンバーに伝えること」等、創造力に関する内容と表現力に関する内容の双方から挙がった。しかし、いずれの学生もグループで協力しながら納得のいく発表ができたことが記述内容から読み取れ、全体的に学生は試行錯誤しながらも、自分

なりに創造力と表現力が身についたと感じていることが示唆された。

また、音楽表現の要素を取り入れることについて、本年度はすべてのグループが読み聞かせの際に効果音や演奏を複数箇所に入れていた。これは筆者が初回授業にて実際に楽器を用いて説明した結果だと考えられる。前年度はレジュメや口頭で「音楽の要素を取り入れよう」と伝えるに留まっていたが、具体的に例示することで学生が想像しやすくなり、新たなアイデアにつながることで表現が充実することが明らかとなった。

②課題および改善点

1点目は、前半の準備で活動全体の通し練習が十分にできないことが挙げられる。後半は製作物がほぼなくなる分、発表の練習に時間を割けるようになるが、子どもたちにとって分かりやすい言葉の選び方や、場面にふさわしい効果音といった表現が、前半の段階では不十分の状態に陥ることになってしまった。実際に子どもたちの反応を経験することで得るものも多いが、準備不足からくる緊張で納得のいく表現ができない事態を避けるためにも、事前の入念な準備は課題である。

2点目は前年度の課題と重複するが、子どもと初対面の状況で緊張感のある発表となることである。今年度も保育室に入ってすぐに発表を行うグループがほとんどだったが、机や楽器を準備している間に子どもたちに話しかけ、やり取りを行う学生もいた。この課題に対し、たとえば他の授業と連携し、自分たちが発表を行うクラスで事前にボランティアに出向くといった改善案も考えられるが、前述した学生のように、自分たちの力で保育室内の雰囲気を作り、発表時の表現力につなげることも必要である。

4. 保育者へのアンケート調査

各年度とも発表を見学した保育者向けのアンケートを事前に配布し、発表日の約1週間後に各保育所で直接回収した。アンケートの項目は、まず回答者自身に関する基本事項を尋ねた後、児童文化財の創作を含んだ活動全体に関する質問を選択式で3項目、記述式で1項目を設定し、回答を求めた。そのうち、

分析に使用した項目は発表に対する子どもの反応および発表全体の感想（いずれも記述式）とした。分析の方法は、回答欄に記述された内容を文章ごとに区切って類似の回答をまとめ、さらにその中から創造力と表現力に関するものを取り上げた。

1) 2017年度の結果

(1) 選択式アンケートの結果

図1 2017年度アンケート結果の通り

(2) 記述式アンケートの結果

創造力および表現力に分別した記述内容について、以下に抜粋したものを記載する。

①創造力に関するもの

- ・お風呂というテーマが、子どもにとって分かりやすく興味をひくものだった。
- ・初めて見る内容の絵本でしたが、よくくいついて見ていたと思います。
- ・(子どもが) 絵本が手作りだということを聞いて驚く姿があった。
- ・絵本が手作りで、ピアノも作曲したということを知り、温かみがあり気持ちが込められていることが私達にも子ども達にも伝わってきました。

②表現力に関するもの

- ・絵本の中に仕掛けがしてあり、子どもたちは目が離せない状況でとても引き込まれていました。
- ・手足に動きのあるペープサートが子ども達をひきつけており、導入等で注目させる上で有効だった。
- ・子どもたちの目が先生さんたちに集中し、絵本も手遊びも楽しんでいるのがわかりました。
- ・絵本を読んでいる時、“間”が全くなくて少し聞きにくかったかなと思います。
- ・声の大きさは子どもの様子を見ながら大きさやトーンを変えるなど臨機応変にできるようになると更によくなると思います。
- ・効果音もあって良かった。

2) 2018年度の結果

(1) 選択式アンケートの結果

図2 2018年度アンケート結果の通り

(2) 記述式アンケートの結果

2017年度の結果と同様に、創造力および表現力に分別した記述内容について、以下に抜粋したものを記載する。

①創造力に関するもの

- ・紙芝居は手作りされていて、普段保育所で読む既成のものとは違い、わくわくしたようでした。
- ・オリジナルで一から作品を作り上げていて、熱意を感じました。
- ・生徒さんが自分達で考えて作った手遊びやクイズ、紙芝居など、新鮮でこちらも興味深いものでした。
- ・少し長かった為か途中で子どもたちの集中が切れてしまう姿が見られました。
- ・3歳児には少し難しかった気がしたので、もう少し分かりやすいお話が良かったと思います。

②表現力に関するもの

- ・はきはきとし、明るい表情で良かったです。
- ・絵本の中ででてきた効果音では、実際に水を使ったり、楽器を使ったりと工夫も見られていてよかったです。
- ・紙芝居の中で楽器を取り入れたりされていて、子どもたちはとても興味津々でした。
- ・メリハリのある読み方、強弱をつけたり、テンポを変えたりすると、もっと楽しめると思う。
- ・紙芝居の中で出てきた曲が『どんぐりころころ』など知っている歌だと、子どもたちも一緒に歌って楽しむことができたのでは、と思いました。

3) 考察

(1) 選択式アンケート

2017年度については、全体的に「良い」または「やや良い」という結果がほとんどであることが分かる。特に、「絵本のテーマ」「絵本としての完成度」の質問からは創造力、「場面に応じた表現」「声の大きさ」「子どもたちを惹きつける雰囲気づくり」の質問からは表現力がそれぞれ評価されていると考えられる。一方で、学生の発表内容における「導入」および「絵本以外のお楽しみの内容」については「やや良くない」という回答が数件あるが、これは前半発表時に

保育現場から意見があったように、「絵本の世界観を大切に作る」という点で創造力および表現力双方の一層の向上が求められていることが示唆されている。なお、2018年度についても、結果に大きな差異は見られなかったことから、保育現場からの学生の創造力および表現力の評価は同等であることが読み取れる。

(2) 記述式アンケート

各年度に共通して、絵本や紙芝居を子どもたちが興味を持って聞いていたという記述が多く、「子どもたちが引き込まれていた」「興味を持っていた」といった記述が2017年度のアンケートでは12件、2018年度では7件あった。さらに子どもの興味を呼び起こした要因を挙げている記述を整理すると、物語の内容が「お風呂」「生き物」「どんぐり」等、子どもにとって身近なものを題材にしていたこと、楽器や水で効果音を入れていたことに大別され、各年度合わせてそれぞれ7件と22件であった。このことから、学生が物語を創造し、言語や音楽といった複数の分野で表現する力を習得できたことが読み取れる。また、読み聞かせ中の効果音に関する22件の記述について、2017年度は1件のみで、その他の21件はすべて2018年度のアンケート結果によるものだった。2018年度は全グループが効果音をつけていたこともふまえると、2018年度の発表は2017年度よりも表現分野の充実度が増したと捉えることができる。

しかし一方で、子どもにとってなじみの薄い題材であった場合や、絵本や紙芝居の内容および読み聞かせ後の活動内容が年齢にそぐわない発表だった点について指摘している記述も複数あった。これは子どもの発達段階や興味関心を捉えた活動を創造して立案すること、発表までの準備段階で教員側が適切な指導を行い学生の表現力を高めることの重要性を示唆している。

なお、各年度とも前半と後半の発表における質の変化はアンケート結果からは見いだせなかった。これは発表を行った保育所や子どもの年齢等、2回の発表を全く同じ状況で実施することができなかったためだと考えられる。

図1 2017年度アンケート結果

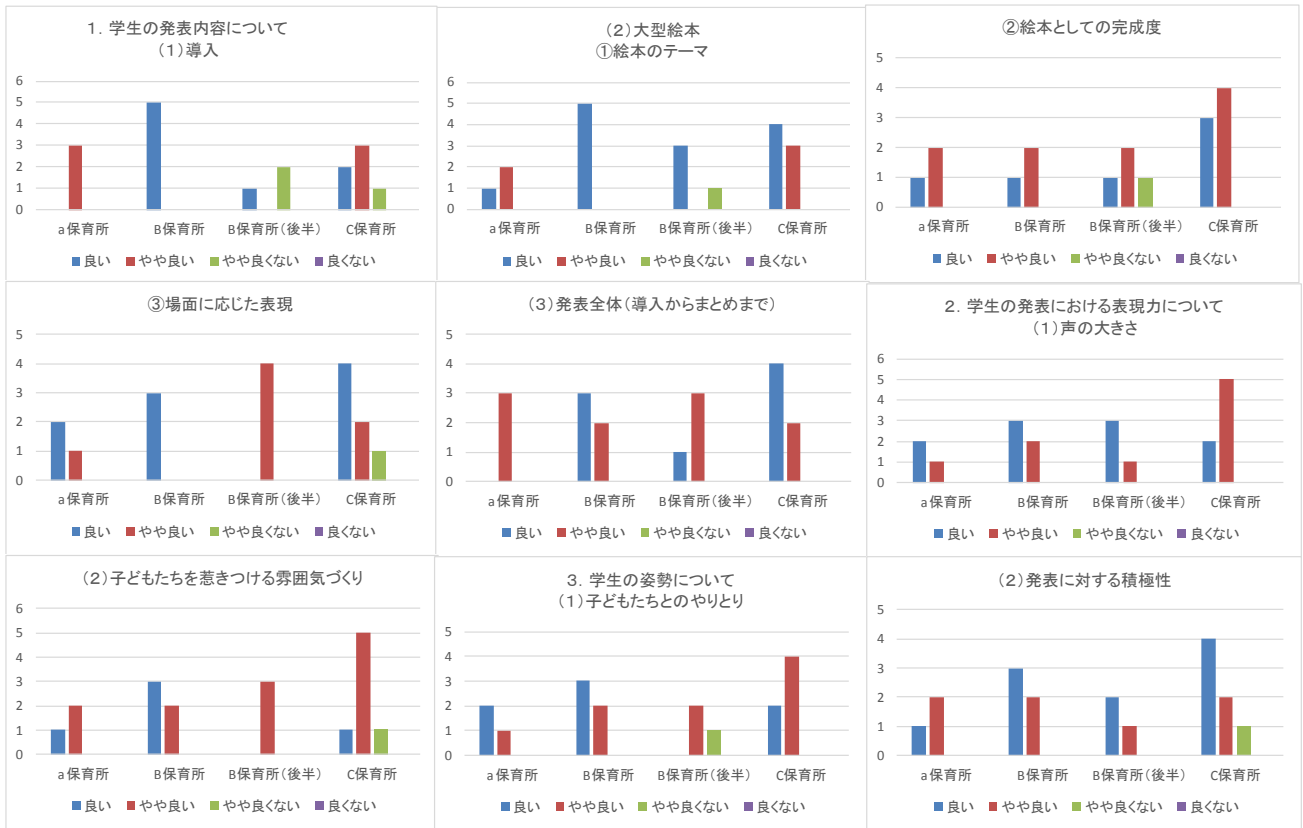
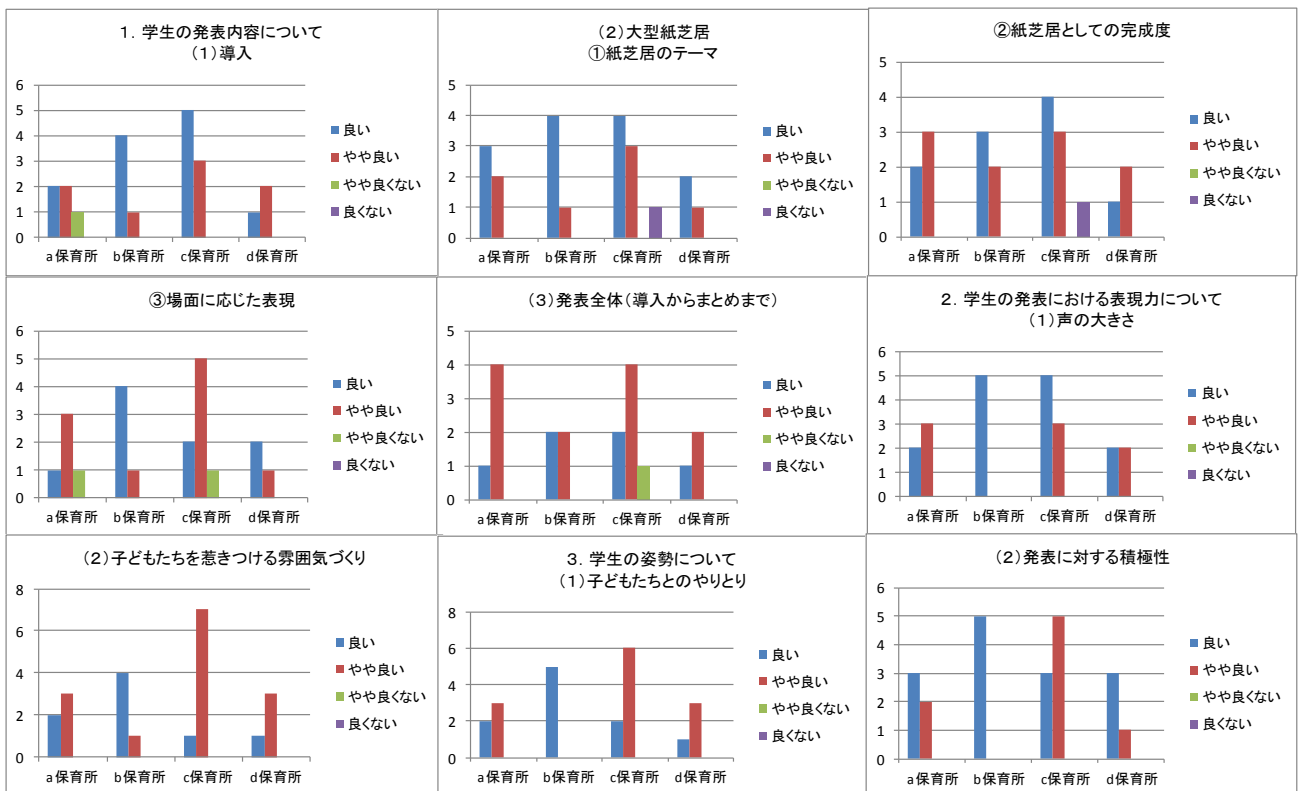


図2 2018年度アンケート結果



5. 総合考察

本研究は、保育者を目指す学生の創造力および表現力の育成を目的とした。この取り組みをとおして、総合的な表現活動からその力を向上させることができたとともに、学生は、絵本および紙芝居の創作と発表をとおして、自分たちで新たなものを創り上げる「創造力」を行使し、子どもに伝わりやすく、楽しませることのできる言語表現について試行錯誤を繰り返しながら、保育において重要な言語表現を学ぶことができた。また、複数の表現分野を取り入れることについても、創作過程から造形、楽器等を用いた音楽的要素の活用および発表から音楽表現についても様々な手法を検討し、幅広い表現方法を知ることができたことから、学生の「表現力」の育成にも良い効果を与えたことは明確であった。本来、保育における5領域は、総合的な視点で取り入れ、生活や遊びの中でそれぞれが重なる部分の多いものであると言われつつも、研究においてはそのほとんどが個別的に進められている。その中で、複数の領域を重ね合わせた本取り組みは学生にとって保育における実践の学びが深まったとともに、机上学習ではなく保育現場で実際に保育者として活動することにより深い学びを得た実感があることから、一定の成果があったと言える。

この2年間の取り組みを振り返り、いくつか課題点も見つかった。まず、各年度とも課題となった、事前準備における学生の作業時間の大幅な遅れである。創作作業に時間を費やすことにより、特に前半発表までに幾度も練習を重ねることができたグループは少なかった。そもそも本取り組みのコンセプトとして「保育現場における子どもの日常生活に根差した活動」であったことに立ち返り、今後の取り組みにおいては、創作する絵本または紙芝居を「大型」と限定しないことで、学生が表現力および表現方法について研究できる時間を設けていくと同時に、本研究のコンセプトにより近づけるのではないかと考える。また、これまでは各講義において作業内容は指定せず、各グループの学生同士で計画的に進めるように伝えていたが、事前に各講義の内容について計画を立て、作業内容をある程度限定することで、作業の進行を一定の速度で進められるのではないかと

と考えている。創造力を十分に発揮できたことで学生が創作物に工夫を凝らしたことは評価できるが、同時にそれを計画的に行うことの重要性も学べるよう努めていく。

最後に、保育現場の先生方に依頼したアンケート内容についてだが、学生の創造力および表現力の育成を目指すため、この2点に関して保育現場における意識についても調査すると、学生に求められるレベルや内容がより明らかになるのではないかと考え、今後の検討事項とすることとした。

以上の課題点について改善方法を検討しつつ、多角的な視点で今後の実施方法についても工夫を凝らし、本取り組みの継続を目指していきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、発表の場の提供とアンケートの回答に快くご協力いただきました各保育所の先生方に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』株式会社チャイルド本社 p.18
- 2) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』株式会社チャイルド本社 p.9
- 3) 前掲2)
- 4) 前掲書 p.20
- 5) OECD 教育研究革新センター編, 立田慶裕・平沢安政 監訳 (2013) 『学習の本質—研究の活用から実践へ—』明石書店, pp.400-401
- 6) 麓洋介 (2018) 「音楽を生み出す遊びの開発—造形表現を参考にして遊びから音楽を創作する試み—」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第29号, pp.11-20
- 7) 梶間奈保 (2016) 「授業における創造的音楽学習「音の絵本」の発展的な学び—「おはなしレストラン」での地域実践をとおして」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』第54巻, pp.139-148。
- 8) 大塚習平 (2007) 「表現発表プロジェクトによる総合的な能力の育成—表現発表における造形教育の関わりと可能性—」『美術科教育学会誌』第28巻, pp.89-101

- 9) 指田利和 (2013) 「保育者養成における総合的表現教育「子ども会実習」の実際～表現教育の実際Ⅰ：児童文化～」『こども教育宝仙大学紀要』第4巻
- 10) 津山美紀・富永剛・相原豊 (2014) 「表現力育成についての一考察—表現発表会をとおして—」『九州女子大学紀要』第51巻, pp.69-82
- 11) 増原真緒 (2019) 「想像力向上をねらいとした『おはなしづくり』の効果—保育学専攻学生の事例研究より—」『創発 大阪健康福祉短期大学紀要 第18号』大阪健康福祉短期大学 p.41-52
- と領域「表現」の連携授業についての一考察—保育者養成校における科目間の試験的連携—『幼年教育研究年報』第32巻
3. 梶間奈保 (2015) 「音楽教材「音の絵本」発表をとおして音への興味関心を育む試み—「おはなしレストラン」の地域実践をとおして—」『しまね地域共生センター紀要』第2巻
4. 吉田真理子・岩附啓子・小畑真梨子 (2018) 「諸分野の協同による領域「表現」の授業—紙人形劇づくりを通して—」『三重大学教育学部研究紀要』第69巻
5. 増井知世子 (2015) 「創造力の育成をめざした音楽科教育(2)—詩の朗読に合うBGMの創作—」『広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要』第62号
6. 平尾憲嗣・滝沢ほだか (2018) 「保育者養成における音楽を用いた表現領域の学びについて—情景を想像する視点に着目して—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第51号

参考文献

1. 汐見稔幸, 無藤隆 (2018) 『〈平成30年度施行〉保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント』ミネルヴァ書房
2. 神垣彬子・意東智里・尾崎公彦 (2010) 「領域「言葉」

A Study on the Development of Creativity and Expressiveness Among Students of Childcare : The Creation and Presentation of Children's Learning Materials Incorporating Multiple Fields of Expression

Yamakawa Chika*, Masuhara Mao**

Abstract

The purpose of this research is to examine how to nurture childcare providers' creativity and expressiveness. For this purpose, we asked students of childcare to make presentations for children in the classes of nursery schools in 2017 and 2018. Its content was based on the concept of “activities rooted in children's daily lives at childcare sites” and about activities adopting multiple expression fields. They were wide-ranging such as the creation of cultural assets through which children can enjoy interacting (e.g., large picture books and picture-story shows) and the development of sound effects and music playing during reading. Then, we examined students' responses, review of the presentation, and the content of questionnaires to childcare providers at a nursery school. The analysis showed that some progress was attained in the development of students' creativity and expressiveness. In future study, we are going to improve this project by not limiting picture books and picture-story shows to the large size, deliberating students' works in every class, and revising the content of questionnaires for childcare providers.

Key words: childcare provider, creativity, expressiveness, comprehensive expression, child culture

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Yamakawa Chika
〒690-0823 4280 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane Prefecture
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Welfare
E-mail : c.yamakawa@kenko-fukushi.ac.jp